

マナー講習会でお伝えすること

2024.2.3

項目	お伝えすること	補足	
試合前	メンバー表	先発メンバーは、漢字と平仮名でフルネームを記入。 控えメンバーは、カタカナのみでフルネームを記入。 女子選手は、背番号を丸で囲う。（アナウンス時に「〇〇くん」「△△さん」と使い分けているため）	メンバー表には、登録選手全員を記入。（天候の都合で翌日以降に特別継続試合となった際を考慮） なおチーム編成の上限は、2023年度より20名から25名以内に変更。
		氏名欄の右端には学年（数字）を記入	投球制限の関係
	会場到着時	会場に到着したら、速やかに「チームが到着した旨」を大会本部へ伝える。 またメンバー表は作成でき次第、速やかに大会本部へ4部（原本を含む）提出。	メンバー表を提出するタイミングは、攻守を決めるトスの時ではないことに注意。 4部を必要とする理由は「相手チーム用」「球審用」「控え審判用（原本）」「アナウンス用」。会場によってはアナウンスが無いケースもあるが、平日頃の動作として統一。
	攻守決定のタイミング (ジャンケン)	第1試合：試合開始予定時刻の30分前 第2試合以降：前の試合の3回終了時、または試合開始後60分経過時のいずれか早い方	前の試合が早く終了した場合は、次の試合を試合開始予定時刻前に開始することがあるので、試合開始予定時刻60分前には試合会場に到着し、本部に到着を届けること。
	ベンチ入りできる人	監督（30番）・コーチ（29・28番）・代表者1名・スコアラー1名・マネージャ1名・トレーナー1名（資格証を提示）で最多7名。 また給水係2名は、チームの任意に季節に問わずベンチ入り可能。 （攻守決定時にその旨申告し、大会本部より給水係のストラップを受け取る）	監督・コーチは成人者（20歳以上）に限る。 給水係は必ずしも女性とは限らないが選手への指示等は厳禁。
	ベンチ入りする方の服装	選手・監督・コーチは、ユニフォーム・アンダーシャツ等、全員、同形・同色のものを使用すること。ただし、スパイクの色は問わない。 代表者・スコアラー・マネージャはスポーツに適した服装。 ユニフォームを着用する場合は、チームと同一の服装（ユニフォーム・アンダーシャツ等）とし、ユニフォームの上着は監督・コーチと区別できるようにすること。	コーチのスボン裾に注意（例：ロングタイプのスボンでストッキングが見えない状態やレッグウォーマー着用等） 帽子は華美なもの、ベンチ内で身動きが取りにくい物は不可
		素肌が見える短パン姿でのベンチ入りは不可、ただしスパッツ等を着用し素肌が見えない場合は可	スパッツは相模原市の大会では認められるが県大会等では不可
	使用できるバット (2025年度から)	安全面を考慮し、学童部では、一般用バット（軟式用）のうち、打球部にウレタン、スポンジ等の素材の弾性体を取り付けたバットの使用を禁止。一般用バットであっても、上記以外の木製・金属製・カーボン製・複合（金属／カーボン）バットについては使用制限は行わない。	少年用（少年軟式用）バットの使用制限はない。 ※JSBB公認、ヒビが入っていない等はルールは従来どおり
	サングラス	<選手> 2023年度から投手のサングラス装着も可、野手は帽子の底に載せることも可。ミラーレンズはともに不可。 なお、試合前の攻守決め（ジャンケン）の際に持参し、現物確認を受けること。	<ベンチ入りする大人> ミラーレンズは華美な装具の着用を避けるという意味から着用しないよう要請。底の上に載せることも利用目的を考慮し、控えてもらうよう要請。 試合前の「道具チェック」の際に服装チェックの一部として確認。
	ベンチ内に持ち込めるもの	電子機器類（携帯電話・スマホ・タブレット・カメラ・ビデオ等）の持ち込みは禁止とするが、電子スコア記録用として（パソコン等）1台の持ち込み・使用を認める。 メガホンは1個に限り可。	携帯電話・スマホについては、昨今のご時勢では常に身に付けている方が大半であるため、携帯すること自体に注意は与えないが、ベンチ内では操作しないこと
テーピング・絆創膏・マスク	テーピング・絆創膏は肌と同色系を基本とし、攻守を決めるトスの際に申告すること（本人同伴）。花粉症対策等でマスクを着装する場合も、同様に申告しておくこと	投手は両手ともにテーピング・絆創膏は装着不可	
ブルベンでの投球練習	攻守決定後、会場内にブルベンで先発バッテリーに限り投球練習することが可能。なお、ベンチ入りする監督・コーチがキャッチャー役を務めることもできるが、その際もマスクは着用。	バッテリー役として立つことは不可	
整列	当該試合の審判クルーが所定の位置に集合したら、ベンチから出て一列に整列。 球審の合図により、選手はホームベース前に整列。	選手以外のベンチ入りメンバーも全員ベンチライン前に出て、同様に整列	
試合中	応援	応援 楽器等、鳴り物での応援は行わない。	ウィッツUJばり球場のみ、メガホン等での応援も可
	ベンチライン	ベンチラインを越えてグラウンド内に入ることができるのは監督（30番）のみ。応援席とベンチを区別するラインも越えないこと。またベンチの後方部にも応援者は立ち入らないこと ベンチ前で円陣を組んでいる際に給水係等がベンチラインを越えて選手の首へ巻く等の行為もNG	ベンチ入りするメンバーと区別がつかないため 救護に関してもまずは監督（30番）が初期対応にあたり、必要に応じて資格所有者に支援を要請する場合あり

項目	お伝えすること	補足	
試合中	冷却用タオル	猛暑対策として選手の首に濡れタオル等を巻く場合も、ベンチ最前列ではなく後方部で対応すること（その状態でグラウンド内に立ち入ることは不可）	栄養補給用ゼリー等、軽食を摂る場合も、ベンチ後方部で対応すること
		汗を拭うためのタオルを常時、首に巻いていることはNG	-
	カメラ席	ホームベース付近でのカメラ・ビデオ撮影は、カメラ席用（「カメラ」と記載されている場所での撮影は可。記載がない場合、ピッチャーとキャッチャーの延長線上に90度の角度で設置されているバックネット後方部での撮影は不可	-
	防寒具	防寒具としてランナーコーチにジャンパーを着させることは可。投手役の選手が出塁した場合も、球審に申告すれば着用可。	-
	マナー	投手は、ロジンバック以外はポケットに何も入れないこと。	-
		ロジンバックは地面から持ち上げることなく、指で触る程度が基本的な使い方（マナー）。	仮に持ち上げたとしても投げ捨てることなく、そっと地面に戻すこと
		ロジンバックを使用した後、指に息を吹き掛けたり、ズボンで指をこすったりしないこと	-
		バッティンググローブをズボンのポケットにしまう場合は、はみ出さないようにしっかりしまうこと。	-
		バットのグリップエンド部のテープが剥がれている場合は、試合前に補修しておくこと	バットのひび割れ、凹みがあるもの、あるいはJSBB公認マークが付いていないバットは使用不可
		グローブの紐の長さは、親指の長さ以内に。	-
		2塁ランナーを惑わす行為として、足で砂を掛ける、またはランナーの前を通過する行為は禁止。	右記はショートを例にしたものであり、他も同様
		試合進行のスピード化に努めること。	
	二段モーション	（守備側の一例） ・サイン確認の時間を短縮 ・控え捕手を早めに準備させておき、試合に出場している捕手が走者もしくは打者でチェンジした場合には、速やかに控え捕手を準備投球に向かわせること ・攻守交替時に控え選手がベンチを出て守備練習を見守ることおよび投手の準備投球に合わせて素振りをするのは禁止 ・ファウルボールの後、投手は新しいボールを球審から受け取り次第、速やかに投手板につくこと ・外野に飛んだファウルボールは、レフト・ライトが拾いに行くこと	（攻撃側の一例） ・サイン確認の時間を短縮 ・攻撃に移る際、その回の先頭バッターとベースコーチは円陣に加わらず、速やかに所定の位置に付けるよう準備すること
		ランナーがいないケースにおいてもキャッチャーは投球を取り損ねても、ランナーがいるケースと同様にまずは自らがボールを取りに行く姿勢を心掛けること	パスボールを取りに行こうとせず、球審に新しいボールを要求することはNG
		チームの自他を問わず、誹謗中傷するような暴言・行為は絶対に行わないこと。	応援者に対しても、各チームの監督は責任をもって同様に対応すること
二段モーション	2018年度の規則改正により二段モーションに関する記述が無くなった。つまり規制は撤廃された。しかし、ランナーがいる際にこの動作から牽制球を投げた場合は「投球動作の変更」としてボーク。高校野球では従来どおり二段モーションを禁止しているため、学童の時代から癖をつけないこと。	規制の記述が無くなった（ペナルティが無くなった）とはいえ、正しい投げ方を身につけること	
ボークではなく注意で済ませ回数	低学年大会では、いきなり1回目からボークを宣告せずに注意で済ませたが、その基準が曖昧であったため、考え方を統一。チームに対してではなく、同一投手に対して1回とカウント。投球動作の中断や（右投手の）3塁偽投等、明らかなものは1回目からボークを適用。	-	
70球の投入制限 (4年生以下は60球)	ボークを犯した際の投球もカウントする	球数制限は2020年度から採用。当初はボークの際は球数にカウントしなかったが、翌年から「カウントする」へ変更	
	申告敬遠はカウントしない	-	
	本部（控え審判）でのカウントを正とする	-	
	ダブルヘッダで2試合目を行う時は、攻守決定時に球審より1試合目の投球数を両チームへ伝え相互確認する。	その際は、両チームともにスコアブックを持参	
	練習試合後に市公式戦に参加する等、1日2試合(以上)を行う場合でも、市大会側としては、公式戦以外の試合での投球数は考慮しない（南部大会と重なった場合も同様）。	ただし、この投球制限の趣旨を理解し、選手の怪我・故障の防止に努めること	